学校体験における印象に残る場面と＜物語化＞
- 脱青年期における若者が語った教師との関わりについてのエピソード -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
正親　一道

本研究では、インタビュー調査を行った集団は青年期の若者である。青年期とは発達心理学において 14 歳から 25 歳頃までの自我意識・社会的意識が発達するとされる時期であるが、近年青年期の変化が指摘されており、そこで新たな概念としてあがっているのが「脱青年期」である。脱青年期は青年期と成人期の間とされる期間で、「自分とは何者か」、「自分はどう社会と関わっていくのか」という問いに対して定まった答えは出ておらず、試行錯誤を繰り返している時期なのだ。今回インタビュー調査を行った集団もこの脱青年期にあてはまると考えられる。

また日本における学校は、欧米に比べて非常に生活に密接に関わっている＜場＞である。思春期の生徒にとっては、一日の大部分を過ごす学校は強い印象と意味を与える可能性が高く、ゆえに今回のインタビュー調査でも思春期における学校体験が語られていることが考えられる。

さらに学校は同年代の人間と教師という大人が存在する＜場＞である。同世代との友人関係も重要ではあるが、知的な関係でいえば教師・生徒間の関係性は非常に重要である。生徒は「学ぶ」という立場であるがゆえに、教師の発言は生徒にとって素直に吸収しやすく、特に日本では伝統的な文化もあり、学校体験での教師の行為が印象に残りうる可能性が高まるのである。また生徒は教師の＜人間＞そのものを観察し、学んでいることがインタビューからうかがい知ることができた。

脱青年期である彼らは、「自分とは何者か」、「自分はどう社会と関わっていくのか」という問いに対して試行錯誤を繰り返している時期であると考えられ、「自我同一性」の獲得を目指している時期にある。本研究を通じて、彼らは学校における教師との体験を編集し、＜物語化＞することで、「自我同一性」につなげているのではないかと推測できた。インタビューで語られた体験は、単なる事実にとどまらず、肯定的自我同一性を後押しするために意味づけられ、＜物語化＞されているのではないかと考えられたのである。